

教宣 せぶん

共同総行動 断面図

前がかり

共同総行動の締めくくりとなったRING・RINGデモでは、気持ちが「前へ」「前へ」となっていくのがわかりました。出発地点では前列後方にいたのですが、終了時点では最前列に陣取っていました。本社前でのシュプレッヒコールでは、自らのボルテージも最高潮に達していました。主役を演じるということは「こういうことか」と感じたしだいです。他方、このRING・RINGデモを、沿道からカメラに収めてくれている「応援団」の方がいらっしゃいました。このデモを、この日の行動を、具体的に、臨場感をもって伝えようとしてくれている方たちです。実は教宣部として、私も同じような趣旨でデジタルカメラを持って行きました。しかし、私もこのたたかひの「主役」なので、私に求められていることはシャッターを押すことではなく、隊列の真ん中に入って「生活と雇用を守れ」と叫ぶことだと思い、シャッターは一度も押すことなく行動を終えました。

「演劇」がそうであるように、一つの作品が完成するためには、様々な役割を担ってくれる方たちがいます。監督・脚本家・演出家など、全体のシナリオや構成を考へる方たち、美術や照明、音声を担当してくれる方たち、道具を準備してくれる方たちなど、舞台に決して登場しない役割を担ってくれている方たちがいます。そして、その作品を演じる主役・脇役がいます。どの役割がぬけても、決して作品は完成しません。この作品を仕上げるのに、資金が用意されているわけではありませんし、多くのスタッフがいるわけではないので、各々が色んな役割を兼任しなければなりません。主役が舞台の準備にあたることも、営業活動にあたることも当然です。しかし、ひとたび幕が上がれば、その舞台を演じる主役は私たち以外に存在しません。私たちがひと際大きな声を出して訴えなければ、この「劇」の真実味・臨場感は決して伝わりません。そんなことをあらためて感じた「総行動」でした。

こんな観点でこの日の総行動を振り返ってみると、同じく主役を演じる仲間が前がかりになっている場面があったのを思い出しました。それは本社前で抗議行動を行い、要請団が要請書を会社に渡そうと玄関に向かい、それに呼応して人事企画部のメンバーが社内に入れさせまいと出てきた時でした。要請団メンバーに入っていない仲間が、その輪の中に果敢に飛び込んでいきました。要請団メンバーを押しよけ、最前列に陣取り、「なぜ中に入れられないん、こら」と怒りの声を発しました。「この生活と雇用を懸けたたたかひに負けるわけにはいかない」という先輩の闘志を感じた瞬間でした。